

小浜正子著

『一人っ子政策と中国社会』

幅崎 麻紀子

から構成される。

序章

解説 アジア近代のリプロダクションの変容——出産の近代化

と家族計画の普及

第一章 中国の人口問題と計画出産

第二章 中国の人口と人口政策——ジェンダーとリプロダクシ

ンからみる中国人口史

第二章 非合法墮胎から計画出産へ——中華人民共和国成立前後

の性と生殖をめぐる言説空間の変容

第二部 上海の計画出産

第三章 都市の女性に浸透する計画出産——一九五〇～六〇年代

上海におけるリプロダクションの変化

第四章 上海における一人っ子体制の成立——一九七〇～八〇年

代

第三部 中国農村の計画出産

第五章 先進的農村における計画出産の展開——遼寧省Q村

第六章 「遅れた」農村における計画出産の紆余曲折——湖南省

B村

終章

以下に、各章の論点をまとめる。

序章では、「計画出産（中国語で「計画生育」）が一般的に「一人っ子政策」と呼ばれるものとは異なることを説明することから始める。「計画出産」は一九五〇年代後半から始まり、当初

評書

本書は、中国の大都市上海の歴史を長年研究してきた著者が、中国の女性にとつての計画出産とは何かを、文献資料と口述資料をもとに理解しようとしてまとめたリプロダクションの歴史研究である。研究のきっかけは、「情理をわきまえた」中国の友人が、「一人っ子政策」を受け入れているように見えるというギャップにひっかかりを覚えたことだったそうである。本書の研究の資料は、都市と農村の文献とインタビューデータであり、それらを駆使して、都市と農村、農村の地域差をもとらえた広大な中国のリプロダクションの変容が重層的に捉えられている。著者は二〇〇〇年代初頭から数名の研究者とともにフィールドで口述データを収集しており、本書は中国のリプロダクションの変容をめぐる歴史書であり、エスノグラフィとも捉えることのできる魅力的な著作となっている。

本書の構成は、序章、解説、終章を除くと、三部仕立ての六章

は避妊による生殖コントロールの普及、子供を少なく産むことの宣伝であった。一九七〇年代末には、「ひと組の夫婦に子ども一人」とする強制力のある「一人っ子政策」となり、国が子供の数を管理することが当然視されてきたと述べる。そして、これまでの中国の計画出産をめぐる議論が、八〇年代以降の「一人っ子政策」に集中し、批判的論調のみが展開されてきた点を取り上げ、「政策実施の方法の強制性が批判的に論じられて、女性達は不妊手術や中絶を強要された犠牲者と捉えられている。そこでは欧米における人権意識を前提に、遅れた他者としての中国社会の非人道性を批判する視点が強く、中国の計画出産を内在的に捉えようとする姿勢は一般的とはいえない。」(一頁)と偏った論調を批判する。その上で、本書が、生殖の現場、特に政策の対象とされた女性達の主体性に着目し、一九五〇年代以降の計画出産の展開過程について、女性たちの政策の受け入れ／抵抗、他のアクターとの交渉に注目して、「一人っ子政策」を女性の目から理解することを目的とした研究であることを明示する。さらに、①一人っ子政策開始からではなく一九五〇年代からの半世紀間を対象とし、②地域による差異、③現場の女性の目線、④計画出産と母子保健との関連、⑤女性のリプロダクティブ・ヘルス&ライツへの影響の五点に留意して論を進めることを述べる。

解説では、中国の計画出産を含めたリプロダクションの在り方を、同時代のアジアのリプロダクションの変容と比較しながら、生殖に家族・共同体・国家などが介入し様々なアクターが関与してきたこと、中国の生殖の国家化の特徴について補足する。第一部では中国全体の人口の推移と人口政策について記述して

いる。第一章では、前近代中国の人口と人口調節について、漢代から唐宋まで約六〇〇〇万人を上限とし、宋元時代には人口が拡大し、元末の減少後、明代には一・六億人、二〇世紀初頭の四・三六億人と、統治の安定と混乱により増減しつつも、中国の人口が拡大した実態及び父系父権の家族を主体に性別選択的な家族規模の調整が行われていた点が紹介される。二〇世紀初頭の中華民国成立後の「節制生育(バースコントロール)」観念の都市部への普及、中華人民共和国成立以降の乳幼児死亡率の急速な低下やベビーブームにより、七〇年代には八・五億人、二〇世紀末には一二億人を超える人口の急増が示される。

著者は、中華人民共和国の人口政策を「一人っ子政策」以前、「一人っ子政策」期、「二人っ子政策」以後に区分し、更にそれを細分化し、第Ⅰ期の「一人っ子政策」以前を①出産奨励期、②計画出産開始期、③計画出産中断期、④計画出産推進期、⑤計画出産全面推進期、第Ⅱ期の「一人っ子政策期」を⑥例外なき一人っ子政策期、⑦一人っ子政策調整期、⑧一人っ子政策強化期、⑨一人っ子政策変容期、⑩一人っ子政策終末期、そして第Ⅲ期を⑪「二人っ子政策期」に区分して、半世紀間の変遷を描く。

第Ⅰ期には、中央政府の生殖コントロール推進姿勢が明らかになり、中国共産党の国策として「一人っ子政策」を開始した七九年以降の第Ⅱ期では、最も厳しく「一人っ子政策」が進められ、男系によって家族を繋ぐ中国社会、特に農村部において女兒の殺害や虐待、過剰な中絶要求がなされ、社会に大きな混乱を招いた。政府は政策の修正を余儀なくされ、第一子が女兒の場合、数年間の出産間隔を経て第二子出産を容認する「一・五子体制」が成立

した。続く九〇年代は、出生率低下強化策としての監視の厳格化、九〇年代後半の出生率の低下に伴うリプロダクティブ・ヘルス策への変容、そして二〇一六年には全ての夫婦に第二子出産が認められるようになり「一人っ子政策」は終焉した。

第二章では、新聞という言説空間での生殖コントロールの変容を分析する。民国期政治権力が墮胎や避妊を放任していた様相と異なり、中華人民共和国政権は、出生統制Ⅱ生殖コントロールに強く介入していたことを述べる。著者はその正当化の論理として、「女性と子供の健康の保護」が掲げられていたことを指摘する。そして、人口急増に対応するため、「国家の富強」「速やかな社会主義建設」「科学的」という論理も用いながら、生殖コントロールを推進する論理が形成されていったと分析している。

第二部は上海の計画出産を詳細に取り上げている。第三章では、五〇年代～六〇年代の都市部の女性達への計画出産の浸透について論じ、上海を計画出産が早くから浸透し、完璧な一人っ子体制を実現した都市として位置付け、上海の女性達にとつてのリプロダクションの意味の変化を分析する。その成功の要因は、都市特有のシステムにあると読み解く。都市では職場や地域の居民委員会が組織的に地域住民を把握し、生活全般を掌握する独自のシステムがあった。そのシステムを通して、教育、食料などの生活必需品が配給されていた。一方、農村では、人民公社が生活を包括する共同体であり、教育、食料、医療などを自給していた。また、上海は移民都市ゆえに伝統にとらわれていなかったことも生殖コントロールの浸透の背景になっていると指摘する。さらに、上海市衛生局によって展開した衛生行政により乳幼児死亡率が低下し

たこと、職場や公安、婦女連、居民委員会などの組織を通して、計画出産の導入を女性の身体に直接働きかけることが可能であったこともその要因として挙げている。

中華人民共和国成立以降は、出産奨励策ゆえに避妊は批判されていたが、五四年頃から、一転して党中央の指示により、上海市衛生局も人口増加抑制のための節制生育を推進し始める。そこには党委員会のほか、工会（労働組合）、婦女連などの組織が動員され、特に婦女連は節育事業を熱心に進めたことが描かれている。背景には女性の生殖コントロールへの切実なニーズがあった一方で、避妊が理解されず、誤った避妊による健康被害、特に男性の不理解や医療者の認識不足ゆえに混乱が起きている。徐々に節育推進工作は大規模になり、人工流産・絶育、避妊リングの装着が保険適用となるなど、五八年頃には、生殖コントロールが職場を通じて浸透する様子を、女性の語りからも裏付けしている。

毛沢東の「大躍進政策」時には、一時後退するが、「大躍進」の破綻により、計画出産の推進が再開し、六三年には、節育手術は無料となり、計画出産専門人材の育成、宣伝教育の強化が行われている。このように上海の女性達に生殖コントロールが普及した理由を、著者は「仕事と家庭の二重負担を抱えた女性たちは、生殖コントロールの導入に前向きで、ときとして夫や舅姑の非協力や反対に遭いながらも、それを取り入れた」（一五二頁）と述べる。

生殖コントロールの方法は、五〇年～六〇年代は「女絶育」（卵管結紮）中心で、人工流産も少なくなかったが、八〇年代はリングが中心となっていた。生殖コントロールは女性たちが選

扱したものであり、生殖の決定権を獲得した一方で、自らの身体に大きな負担をかける苦渋の決定であったと著者は分析する。

続く第四章では、計画出産が早くから浸透し、一人っ子体制が速やかに普及した上海の状況について述べている。一九六四年頃には上海市に子どもの人数を制限する明確な規定があったわけではないが、職場では「子供は二人まで」で、それに違反すると社会的に不利になるという圧力があつた。六六年からの文化大革命では計画出産工作が中断するものの、上海市では計画出産工作推進のための通知を出している。関係者は「六九年から始まった」との認識を持っており、徐々に計画出産工作が強化された。七〇

年代前半には、上海では全国の動きよりも早く、「子供は二人で、出産間隔を空ける」方針のもと避妊が推進され、リングと永久不妊手術の避妊法に集約されていった。七八年に中央政府の「一人っ子政策」が開始されると、上海においても「子供は一人」の風潮が形成され、生殖年齢の女性の身体掌握体制が敷かれ、八〇年には、「特別な事情がない限り第二子は不許可」となっている。めまぐるしく変化する政策に、翌年は「第二子は不許可」との見方が広まるなど、市民は翻弄されていく。

八一年に上海市人民政府が制定した規定では、一人っ子への優遇措置が強化され、特別の事情（第一子が疾患により正常な労働力として成長できない場合など）を除き、すべての夫婦に一人っ子とし、そのための褒賞も懲罰も大きくなっている。

著者は、上海では八四年までに一人っ子体制が確立したと述べる。上海での一人っ子体制の基底には、職場単位による生殖コントロールシステムがあり、それに抗して産むことは難しいという

状況であつた。なぜなら、都市生活において、国家や市は職場などを通して暮らしの隅々までを管理するとともに、生活を保障していたからである。

第三部は農村の計画出産について描かれる。農村部では六〇年代より生殖コントロールが普及し、出生率低下後の八〇年代の「一人っ子政策」期においては、「一・五子システム」と著者が呼ぶ「第一子が女兒の場合に間隔を空けて第二子の出産」が容認されるなど、都市とは異なる様相を見せていた。

第五章では、計画出産が順調に展開された遼寧省のQ村の様子が描写される。Q村は、早くから計画出産が浸透し、出生率が低下した村である。村の女性へのインタビューからは、六〇年代からリングが普及し、生殖コントロールが開始されたものの、個人が近代的な避妊にアクセスする術のない中、村の婦女主任や女性の「はだしの医者」が避妊方法を普及させていたことが明らかにされる。七〇年代は、計画出産が母子保健と関連づけられて、医療系と行政系統の幹部によって推進され、絶育が導入されて浸透し、第一子出産後にリングで避妊をして出産間隔を空け、第二子を産んだら絶育することが一般的となっていた。子どもの人数は二人が一般的であるものの、三人目を産むことも可能であった。Q村の婦女主任は、熱心に粘り強く絶育を女性たちに推奨し、手術をした女性の面倒もよく見ていたそうである。

著者は第二子出産後の絶育が村の規範となっていたこと、熱心な婦女主任の説得を女性達が「強制」と捉えていた点を、女性達が計画出産を受け容れた要因と分析している。さらに、女性自身が生産に積極的であつた理由を、計画出産が女性の希望を後押し

するものであり、「女性と政策が同盟して、家父長制と対抗している」(二五九頁)と読み解いている。

一九八〇年代の最も厳しい「一人っ子政策」期には、遼寧省において子ども一人が原則となり、人工流産も増加している。

「計画外」妊娠を防ぐ名目で、婦人科検診が実施され、女性の身体管理も行われた。著者は、農村部における計画出産は女性が家父長制に抗する術であったと同時に、計画出産を実施する村の行政・医療システムにより、国家が生殖に介入し定着する契機となっていると分析する。

続く第六章では、計画出産が順調に展開したとは言い難い湖南省のB村を取りあげる。B村は歴史ある伝統的農村である。九〇年代まで、産婆や家族などによって助産行為が行われ、地域には豊富な医療やケアの知識が蓄積されていた。しかしながら、近年まで乳幼児死亡率は高く、計画出産の前提となる「子供を少なく産んでもちゃんと育つ」前提は確立していなかった。そのB村に計画出産の概念が入ってきたのは六〇年代末である。絶育とリングが導入され、七〇年代には計画出産キャンペーンが開始された。しかしながら、それは強制性のないものであった。七〇年代半ばには、「子供は二人」との中央の指示があったものの、村人は希望の人数を産み終わると結紮手術をするが、多くの村人が四人以上の子どもを産んでいた。七九年に「例外なき一人っ子政策」が始まると、B村においても二人目の出産が許されなくなり、「超過出産」となる妊娠時には人工流産が要求され、産んだ場合には罰金を払うことがルールとなった。しかし、出産を強行するケースは少なくなかったし、罰金を払うことへの罪悪感もなく、村内

部では超過出産を容認している節があった。「計画外」妊娠への人工流産や罰金は、強制的で暴力的なやり方で執行されていたが、産むこと自体を見逃したケースもあり、見せかけの強制執行であったことがわかる。その理由を、家父長制的な配慮によるものと著者は捉えている。計画外妊娠・出産への対応は、幹部によって異なり、女性たちもまた、場合によっては罰金を払い、自分の望みだけの子どもを産む／産まない希望を実現しようとしていたと分析する。しかしながら、九〇年代は婦人科検診という名目で、女性の身体を管理し、計画出産の執行を厳格化したため、計画外出産を見逃すことが困難になっていく。

Q村B村を比較することで、中国の計画出産の実態は地域によって異なることが見えてくる。著者は父系家族の存続を重視するB村では、村の幹部は、国の代理人ではなく国家と交渉する行為主体であり、女性は、様々な方法で自身の希望する生殖行動を実現しようとする行為主体であったと分析している。そして、「計画出産の導入は、中国の女性達を「産むべき宿命」から解放し、産む／産まないを選択し実行する主体としての形成を促した」(三三四頁)と述べる。

終章では、これまでの論をまとめ、「一人っ子政策」を五〇年代からの計画出産の強化によるものと位置付け、地域による偏差が大きく、その場の条件や人間関係によって左右されるものであったと述べる。そして、著者の最大の疑問であった女性にとっての計画出産と一人っ子政策の意味について、計画出産は初期には中国女性を産み続ける運命から解放したが、「一人っ子政策」開始後は女性のリプロダクティブ・ヘルスとリプロダクティブ・ラ

イツを大きく損なうものとして結論づけている。

著者は本書において、中国のリプロダクション政策とその主体である女性達の実践について、政策の動きとそこに関わるアクター、そして女性たちという側面から立体的にかつ丹念に描きだしている。その多様なアクターの視点にたった立体的な分析は大変興味深く、私はすぐに本書の内容に引き込まれていった。特に、上海の計画出産については紙幅の三分の一を費やし、上海市衛生局の檔案などの多くの一次資料を使って、刻々と変化する生殖コントロール施策の様子を伝えているのは、歴史学者による資料の読み込みの緻密さを物語っており、文化人類学者である私は、歴史学者の文献資料の読み方に改めて感心しながら読み進めた。

農村部の記述においても文献資料による緻密な展開を期待して読み進めたのだが、資料の限界のためか、農村部の施策については説明が乏しく、都市と農村の資料の厚みに差異が出てしまったのは残念であった。しかしながら、歴史研究者である著者が、長年継続的に農村へ出向き、様々な年代の女性や婦女主任などのアクターに聞き取り調査を行っている姿からは、この問題を女性の視点からも解明しようとする熱意が伝わってくる。

私はネパールをフィールドにリプロダクションについて研究をしているが、ネパールと比較すると、中国の計画出産の普及が、いかに急速に進められたかがより一層鮮明に見えてくる。ネパールの場合は、合計特殊出生率(TFR)が一九八五年の六・三から半減するまでに約二〇年かかっている。一方、中国では六〇年代には概ね六前後だったTFRがわずか一〇年で二・七五に急落している。この差異は、家族計画技術の普及がいかに国家の意図

と結びついているかを物語っており、その施策の背後には、女性達のさらなる葛藤の物語があるのではないかと考えている。

中国史研究を専門としない私の誤読もあるかもしれないが、そこはご容赦いただければ幸いである。本書は、厚い文献資料と多くの口述資料のもとに編まれた中国ジェンダー史、そしてリプロダクションを歴史的に捉えた研究書であるが、その魅力に引き付けられる読者はその専門の研究者にとどまらない。それは、都市と農村の女性の生の声によって、歴史が再現されているからであろう。また、折々に差し挟まれたコラムや写真は、本書に描かれた歴史の視覚による理解にも役立つ。

最後に、本書のまとめに係る部分での疑問点を挙げておきたい。その一つ目は、「行為主体性(エージェンシー)」の問題である。著者は農村部の女性達が様々な要因を考慮し、様々な方法で自身の希望する生殖行動を実現しようとしていた姿を「交渉」と理解し、計画出産の導入が、産む／産まないの選択と実行を行う主体としての形成を促したと解釈する。確かに、計画出産の導入は、女性達の行為を決定する大きな要因として捉えうるであろう。しかし、中国の女性たちの行為主体性は、計画出産の導入により形成を促されたのではなく、脈々と受け継がれてきたものではなかったのだろうか。父系の存続を重視する中国社会の主体は個人ではなく父系家族である。その中で、様々な方法で生殖がコントロールされていったという。中華人民共和国以降のような女性の社会進出は進んでいなかったとはいえ、かつて日本の農村社会がそうであったように、農村部では女性も働き手として農業に従事してきた。家長長制の中にも、女性が性交渉を拒んだり積極的

つたりするなど、性の営みに主体として行動をしていた部分があつたのではないだろうか。そうした文化があつたからこそ、計画出産施策を、行為主体性を發揮して自身の生殖する身体を統御することに利用できたのではないだろうか。

中には、家父長制と対抗して、自身の希望を実現した女性、希望通りの子どもを産んだ後に生殖コントロールをする女性、希望の子供数に達するまで「逃げまくる」女性など、様々な女性が存在した。それは、おそらく、農村においては、女性は中華人民共和国の建国による女性の社会進出よりも前から、こうした産む・産まないをその時の状況に応じた形で主体的に交渉していたのではないだろうか。技術という意味では必ずしも成功はしていないものの、墮胎が行われていたということもその一例であり、今世紀に入って培われたものではないような気がしてならない。

もう一つの疑問はリプロダクション政策の両面性についてである。本書では、計画生育と「一人っ子政策」という厳しい政策の中で、行為主体性を持ちながら精一杯生きる中国女性の姿が生きて描かれている。「産みたいときには政策の裏をかいて「計画外」の子どもを産み、産みたくない時には、家族の意向を無視して政策を利用する」(三四〇頁)など、女性達のしたたかで逞しい姿は、読み手に同時代のリプロダクティブ政策についてポジティブな印象を与える。それもまた、一九五〇年以降のリプロダクションをめぐる姿なのだろうが、忘れてはならないのは、そこには過酷で厳しく、時には暴力的に行われた強制的なリプロダクティブ政策が存在するという名でリングが入っているかを確

かめられ、高額な罰金を求められ、家財を没収され、家を破壊され、時には逃げて山奥でひっそりと暮らしていかなくてはならなかった、リプロダクション政策の暴力性の部分である。これまでの研究が描いてきた負の部分のみならずポジティブな部分を描写していることが本書の魅力であるが、女性達のポジティブな語りの裏には隠された部分もあつたのではないだろうか。

そして本書を通して中国のリプロダクションに興味を深めた読者としてさらに欲を言えば、本書では取り上げられてこなかった少数民族への展開についても知りたいところである。人口の約一割程度に過ぎない五五の少数民族への計画出産施策は、当該地域の実情を考慮して進められていた。その導入は漢民族に比べると緩やかであり、一人っ子政策に至っては、少数民族は対象外であつた。計画出産の状況は民族や居住地により差異があり、広大な中国の計画出産の展開を全て網羅することは難しい。しかし、少数民族へのリプロダクション政策の展開についても今後の研究で触れていただくことを楽しみにしている。

本書の魅力は、専門外の私のつたない粗筋紹介では十分に伝えることができなかったかもしれない。ぜひ多くの読者に、本書をお読みいただき、アジアの中で際立った特徴を持つ中国社会のリプロダクションの歴史に触れていただくことを願っている。

(A5版 三九〇頁 二〇二〇年二月)

京都大学学術出版会 税別三〇〇〇円

(埼玉大学研究企画推進室准教授)